

イスラム潮流

NHKスペシャル「イスラム」プロジェクト



●監修

小杉 泰（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）

●執筆（執筆順）

NHKスペシャル「イスラム」プロジェクト

桜井 均（スペシャル番組部エグゼクティブ・プロデューサー）	はしがき
七沢 潔（教養番組部チーフ・ディレクター）	I 章
石井裕一郎（教養番組部ディレクター）	I 章
金子 大也（社会情報番組部ディレクター）	II 章
草川 康之（教養番組部チーフ・プロデューサー）	II 章
立家 成浩（テレビニュース部ディレクター）	III 章
秦 正純（スペシャル番組部チーフ・ディレクター）	IV 章

小杉 泰 コラム・脚注・概説・年表

イスラム潮流

発行日 2000(平成12)年 5月30日 第1刷発行

著 者 NHKスペシャル「イスラム」プロジェクト

©2000 NIIK

発行者 安藤龍男

発行所 日本放送出版協会

〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町41-1

電話 03-3780-3318（編集）03-3780-3339（販売）

振替 00110-1-49701

<http://www.nhk-grp.co.jp/npb/npbtop.html>

印 刷 三秀舎／近代美術

製 本 田中製本

図<日本複写権センター委託出版物>

本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

落丁本、乱丁本はお取り替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-14-080508-0 C0014 Printed in Japan

イスラム潮流

ブック・デザイン 松森雅孝
カバー写真 秦 正純

はしがき

イスラム圏の情勢は日々刻々に動いている。二十一世紀を迎えるにあたって、イスラムに関する報道がメディアに表れない日はない。しかし、それらはE・サイドのいう「イスラム報道」、つまり米欧の視線にさらされた断片記事であること甚だしく、イスラムの全体像をつかんだものとはとうていいえない。

西暦二〇〇〇年四月六日は、イスラムの暦では一四二一年一月一日にあたる。その時間差は現実を反映していないし、ものを測る尺度は統一しておいたほうが便利であるにちがいないが、にもかかわらず、それぞれの来歴と、それによって規定されてきた意識の差異にもっと敏感であつてもよいだろう。

世界の人口の五分の一を占めるといわれるイスラムの人々にとって、いわゆる二十世紀末はどのように映っているのかを想像してみる必要があるだろう。若年人口が急増し、信者が増加し続けているこの宗教にとって、時間はたっぷりある、決して追いつめられた世紀末ではない、ということとは容易にわかる。

混迷を極めるいまだからこそ、取材者はどこにカメラの三脚を立てるべきなのかを問われる。過去をよく見極め、未来を見定めて、イスラムに注目し、イスラム教徒が住む世界に三脚を据えることにした。本書は、去年（一九九九年）放送したNHKスペシャル「イスラム潮流」（四回シリーズ）でおこなった取材のさらに詳細な報告である。

「イスラム潮流」は、具体的に未知な場所・人・言葉への旅であつた。放送からわずか数カ月のあいだにも、取材班が出かけた地域の情勢は激しく変わった。かつて三脚を立てた場所で、新たな潮流に呑みこまれてしまったところは少なくない。

世界を震撼させたイスラム革命から二〇年。イランでは保守派と改革派が命運をかけて総選挙を戦った。保守派の拠点コムでは、ハタミ大統領の改革路線を批判する人々が座りこみ氣勢を上げた。その群衆のなかに、取材したコムの神学生たちも交ざっていたはずである。その一人、ヘイダル君はイラクのサダム・フセインの宗教弾圧を逃れて、イランに亡命した聖職者家族の後継者だ。情勢が変われば帰国してシーア派の教えをイラクに広めたいと願っていた。世界が注視するなかでおこなわれた開票の結果、ハタミ大統領率いる改革派が圧勝し、イランは民主化への道を歩むことになった。改革派の新聞・サラームの元編集長アブデイー氏は、度重なる投獄の苦難をくぐり抜けて、いま何を思うだろうか。前途は多難である。アメリカはイランの改革路線を歓迎したが、同時に米上院がイランの大量破壊兵器開発を支援した国に制裁を科すよう大統領に求める法案を可決した。アメリカのダブル・スタンダードは依然変わっていない。

アジア最大のイスラム教徒の国インドネシアでは、去年の総選挙でイスラム政党が大躍進した。その指導者ワヒド氏が大統領に選出された。ワヒド新大統領は、インドネシアからの分離独立を求めるアチェ州の説得に、イスラムの寛容の精神を掲げて奔走している。しかし、一寸先の闇を照らす光はまだ見えてこない。アンボン島でのキリスト教徒とイスラム教徒の殺し合いの根は深く、その傷が容易に癒えるとは思えない。なぜなら、遠く十六世紀にさかのぼるオランダ植民地時代に、キリスト教徒を優遇しイスラム教徒を酷使する差別の種がまかれていたからである。

トルコでは、人口の九八パーセントがイスラム教徒でありながら、政教分離の立場からイスラムの政治活動は禁じられている。しかし、九九年八月にトルコを襲った大地震は、人々のイスラムへの信仰を呼び覚ました。被災者たちは、瓦礫の下からイスラムの聖典コーランを真つ先に取り出し、傾いたモスクの前

でアッラーへの祈りを始めた。今後、トルコにおいてイスラムを標榜する政党が非合法化されるか、EU加盟ともからんで民主化の行方が注目される。

ソ連邦崩壊後、イスラムの復興が急激に進むロシア。取材を始めた頃、チェチェンが南のダゲスタンに占拠した。その「解放」の目的で、ロシア軍はチェチェンの首都グロズヌイを攻撃、カフカス山麓で冬の悲惨な戦闘が続いた。廃墟と化した首都を捨てたチェチェンのバサーエフ司令官は山岳ゲリラを宣言、それに対してロシアは「テロリストの一掃」を掲げて大量の軍隊を送った。去年、古びたバスでいくつもの峠を越え国境を越えてメツカ大巡礼にやって来たダゲスタンの巡礼者たちは、盲目のシェイフ(宗教指導者)は、この戦乱のなかで無事なのだろうか。また、イスラムを信じるタタルスタンの若者たちが、祖国ロシアに背を向けてチェチェン軍に加わったという噂を聞いた。

実に多くのことがイスラムを信じ、イスラムに生きる人々にかわりのある地域で生じ続けている。だが、だからといって、イスラムのあるところ紛争が絶えないと決めつけるのは早計であろう。

その紛争を海の荒波に喩えれば、海のなかには別の流れが渦巻いているはずである。それを知らなければ問題の表面をなぞっただけになる。海中の中層域には、巨大なエネルギーをたくわえた潮流が、まさに表面に躍り出ようとせり上がっているのかもしれない。そして最深部では、案外ゆつくりと静かな潮が流れているのだらう。それぞれの潮の流れる方向は一定ではなからう。いくつかの層をなしつつ、しかも大きなうねりとなり世界の歴史に登場したイスラムの潮流を、そのプロセスの全体として捉えてみたい、それがシリーズ「イスラム潮流」のねらいであった。

一九九九年はまた歴史に残る年でもあった。セルビア人とアルバニア人が同居するユーゴスラビアのコ

ソボ自治州をNATO軍が空爆し、統一後のドイツがそれに加わった。ユーゴスラビアからすれば、コソボはもとセルビア正教の聖地であり、オスマン帝国の支配に抗してセルビア人が戦いをいどみ一敗地にまみれた因縁の場所である。この地での多数派はイスラムを信じるアルバニア系住民である。ベオグラードのミロシェビッチ政権はコソボ奪回を掲げ、セルビア人を支援してアルバニア人虐殺の引き金を引いた。この「人道に反する罪」の排除を目的に、NATOは国連決議を経ない軍を送った。そして多くの無辜の人々が殺された。コソボ空爆は、二十一世紀にまで持ち越される重大な問いを人類に突きつけた。NATOの行動は、アメリカが進めるグローバル・スタンダードと不即不離の関係にあることに、多くの人々が気づき始めている。そのアメリカの最深部で皮肉にもイスラムへの改宗者が急増し、ユダヤ教徒をしのぐ勢いであるという。

イスラムをめぐる紛争は「歴史の記憶」をめぐる戦いでもある。記憶がナショナリズムや宗教的ルサンチマン(遺恨)と結びつくとき、争いは泥沼化し血で血を洗う凄惨なものになる。だからこそ、宗教間相互の歴史を知らねばならず、その対立の基層にまで取材を深めなければならないと考えた。

「イスラム潮流」は、コソボで進行する事態を視野の範囲に入れながら、「宗教」と「民族主義」という聖俗の対極が癒着した場合の危険と悲劇を、人類がどう克服するのか、その希望はどこにあるのかを探ったつもりである。

一人ひとり出会ったイスラム教徒は、実に寛容で屈託なく涙もろく、持たざる者には例外なく親切であった。イスラムの人口は貧しい地域で増加の一途をたどっている。労働者は熟練していないがみな若い。時間は大きなポテンシャル・エネルギーであり、近い将来イスラムが巨大な潮流となることは間違いないか

ろう。

イスラムでは、アッラーに絶対的な帰依をする者はすべて、人種、民族、国家を超えて平等に結ばれる。これは、近代以前の融通無碍^{うちうごむげ}な人々のつながりを連想させるが、彼らが居住する地域の多くは、明らかに近代の西欧によって植民地支配を受けてきたところである。そうした過酷な支配を通過してもなお強い紐帯で結ばれる、イスラムの同胞意識とは何だろうか。それを、従来のナショナルなものとインターナショナルなものという対立概念で説明することは困難である。イスラムは、トランスナショナル・国家横断的な存在と考えるほうが無理がないように思われる。

さて、日本人はこれまでイスラムのことに関心を持たずに過ごせると信じてきた。しかし現実には多くのイスラム教徒のビジネスマンや労働者が日本に来て多彩な文化を持ちこんでいる。そして、日本人のイスラムへの改宗者も年々増えているという。ここにも、トランスナショナルな潮流がある。

二十一世紀に向けて強引に進められるグローバル・スタンダード化の波に抗して、イスラムがどんな潮流をつけて動いていくのか。取材者はその潮流のなかに身を置き、流されながらも見聞きして記録した。イスラムを参照軸に世界を考えなければならぬ時代が確実に来ていることを実感したこの現認報告が、次のステップを踏むための一助となれば望外の喜びである。

NHKスペシャル エグゼクティブ・プロデューサー 桜井 均

はしがき…… 3

イスラム潮流 点景…… 11

I イスラムが復興している…… 21

メッカ大巡礼—イスラムの原風景…… 24

復興と聖戦の大地—ロシア連邦タタルスタン共和国…… 42

イスラムは国難を救えるか—インドネシア…… 64

大ジハードと小ジハード…… 35

一神教の系譜—ユダヤ教、キリスト教とイスラム…… 40

イスラムと国家—始まった実験…… 116

II 人も金も神がつくった …… 117

コーランと生きる人々―エジプト …… 118

喜捨の精神―レバノン・ペイルート …… 133

トルコ大地震―七五年と七〇〇年の狭間で …… 148

利子をとらず―サウジアラビア …… 167

コーランの成立と教え …… 182

III マンハッタンにコーランが流れる …… 185

台頭する移民イスラム教徒 …… 186

改宗する黒人たち …… 209

融合の萌芽 …… 226

アメリカのムスリム―移民と改宗 …… 237

IV イスラムの定めに生きる …… 239

アシユラの国―イラン・イスラム共和国 …… 244

絨毯に乗ったイスラム …… 257

衝突か対話か …… 289

宗教・民族・国家 …… 309

イスラム文明と西洋 …… 256

スンナ派とシーア派―相剋と和合 …… 286

地図 イスラム世界の広がり …… 314

「イスラム諸国」概観 …… 321

年表 イスラムの二十世紀 …… 325



エジプト

モスクが林立するカイロ。市内にはイスラムの最高学府・アズハルが置かれ、約3000人の留学生が在籍。その多くは卒業後、母国で宗教指導者や裁判官として活躍する。

イスラム潮流 点景 1999-2000

サウジアラビア

紅海に面した海運商業都市ジェッダのロータリー。イスラム世界の實力を誇示するように、近代産業の象徴である車が絨毯の上に乗っていた。

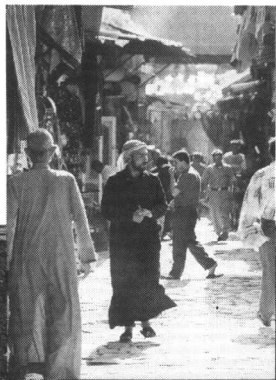


レバノン

ベイルート郊外の幹線道路。1999年6月24日、スタッフが取材中にイスラエルからの爆撃で橋が破壊された。

シリア

女王ゼノビアが君臨した隊商都市パルミラは、東西を行き交う商品の一大中継基地だった。地中海に面したアレppoのバザールには、古代から中世にかけての匂いがいまま濃密に漂っている。





トルコ

1999年8月17日、トルコ北西部をM7.4の大地震が襲った。最大の被災地アダバザールではモスクまでもが倒壊した。惨状のなかで大きな救済力となったのはイスラムの教え、喜捨の精神だった。



イラン

ホメイニ師(手前)とイラクのサダム・フセイン大統領が対峙するケルマンシャーの国境。
イラン・イラク戦争終結から10年経ったいまも両国の交流は厳しく制限されている。



イエメン

30 を越える部族が対立し、それぞれが首長の下に武装化しているイエメン。首都サナアを一步郊外に出ると、たちまちこのような武装ゲリラに遭遇した。